金子兜太先生のふるさと投句

第二回特選・入選作品

選者　秩父郡市俳句連盟会長
金子　千侍　先生

特　選

あの声は托らん後かもほととぎす　　桶川市　小野塚　啓一

講評　ほととぎすの独特の啼き声は、遠く平安から今日、今も人々の心の琴線に妙えなる誌情を奏でているのです。所でこの鳥、托卵（たくらん）といって鶯の巣などに卵を生み育雛（いくすう）を委ねる変わった生態があります。あれ、今啼いているあの声、さて作者の耳にまてよ托卵が旨く出来たという喜びの啼きだ。やあ驚きました。ほととぎすの鳴き声を、これ程までに聞き分けて実写した一句。作者の卓越した感性に感動しきりです。

虫送り顔みな似たる秩父の子　　さいたま市　増田　信雄

講評　『虫送り』（八月十七日）御幣（ごへい）を押し立て、鉦、太鼓、大声で、害虫を村外れまで追い立てていきます。皆野町では立沢、門平地区でこの行事が行われています。これを観ていた作者は、大声で囃立てている子供達の表情、動作が、皆同じ秩父の子に見えたのです。素朴に熱心に伝統を守っていく秩父の子供達に作者の熱い声援の一句でした。

結願の重たき汗や水潜寺　　長瀞町　大前　英俊

講評　本句の眼目は中七の『重たき汗』の語句につきます。今、三十四番の水潜寺に立って満願成就の満足感、張りつめていた心身疲労の開放感、そして何ともいえない嬉しさ。この感動の結実表現が〝重たい汗〟となって総身を包むのでした。俳句のお手本になるような作品です。

入　選

大人の部

新緑の真っただ中に願結ぶ　　さいたま市　大文字　孝一
秩父路や古刹の門にこぶし咲く　　越谷市　松信　賢司
新蕎麦の旗が寄り込む札所道　　日高市　指田　冨久
田水張る武甲映して大棚田　　秩父市　設楽　キマ
五色旗持つ児先導虫送り　　深谷市　保坂　嘉郷
葉桜の風が素通り水潜寺　　東京都　酒井　武雄
いくたびかたずねしこさつはるのまい　　武蔵村山市　おない　たかゆき
再会を喜ぶ肩に花ひらり　　横浜市　鈴木　澄江
三滝を巡りて暮るる著莪の花　　長瀞町　野口　清
天空の里の蛍は星と舞い　　伊勢崎市　川端　一美
殻破る蝉の誕生しずかなり　　秩父市　町田　ヨウ子
美の山の湯舟ゆったり夏に入る　　入間市　菅原　澄子
さるすべり居並ぶ石仏引き連れて　　皆野町　原　和幸
兜太句碑訪ふ楽しさや杉涼し　　高崎市　佐藤　郭子
山頂の真夏の昼は静かなり　　川口市　益岡　勇

小人の部

新緑の和銅の遺跡大きいな　　春日部市　堀　茉利花（十歳）
ひまわりが太陽向いて笑ってる　　皆野町　根岸　政輝（九歳）
尺玉が地面をゆるがし夏終わる　　皆野町　野巻　昂平（十一歳）
秩父音頭色とりどりのゆかたまう　　皆野町　小笠原　美怜（九歳）
桜散りさみしい山に雨がふる　　横浜市　青木　友花（十二歳）
山頂にとんぼが来たり秋近し　　東京都　金　京　柱（十三歳）
美の山で花火と人のかくれんぼ　　皆野町　川田　和花（十歳）
ねむの盆金魚が我が家に仲間入り　　皆野町　渡辺　美緒（九歳）
やまのうえかぜがすずしいいいきぶん　　栃木県　松本　裕慶（八歳）
あじさいや五月雨いろどるにん気者　　練馬区　竹岡　彩乃（十二歳）
夏になり山鳥が鳴く武甲山　　皆野町　福田　優華（十歳）
朝がおの数をかぞえる妹笑顔　　皆野町　関口　実怜（十歳）
かぶとむしたたかうくわがたきのうえで　　野田市　廣木　孝多（七歳）
夏の朝めざましがわりせみの声　　皆野町　黒澤　愛（十二歳）
すいかわりみんなの声がたよりだよ　　皆野町　大浜　菜幹（十一歳）